

ねこ

ねこ

どこにいったのですか、ねこ

……まったく。勝手にどこかへ消えてしまうなんて、薄情なお猫様ですね。

……あら？

あなたは……どうして、こんなところに？ おかしいですね、こんな場所で出会えるはずが……明日を生きていることが、そんなに辛くなってしまったのですか

朝が来るのが、そんなに怖いのでしょうか。

そうですか、そうですか。

ふふふっ、可愛らしい人ですね。愚かなお兄様は、そうやって意味のないことばかりをする。

仕方がありませんね。

今日一日だけは……あなたのわがままに付き合っただけあげましょう。

ああ……。

ここは、まるで夢に見た遠き日の世界のよう……この地は、まさに童話の国に似ています。

星々は夜空に散りばめられた宝石のように瞬いて……

今、この瞬間は、神の手から零れ落ちた奇跡のようです。

ほら……見てください……蛍たちが、妖精の宴のように踊っています。美しい光の軌跡が、私たちを歓迎しているみたい。

あの醜い世界とは違って、この世界は何倍も美しいですね。

本当の現実、ああも息苦しいというのに……

……本当に。

どうしてあなたは、こんな場所に來てしまったのですか
なんて。

本当は……わかってはいますけどね。

愚かな愚かな、お兄様。

妹のことが放っておけなくて、追いかけてしまっただなんて。

でも……そんなところも、可愛らしいと思えてしまいます。

ほら、あの蛍の群れが、まるで私たちを招いているように見えませんか。

フロアライトの煌めきが、私の心を狂わせるのです。

……あら？

どうして目を逸らすのですか。

まるで、やましいことがあるみたいですよ。。

私のいないところで、何をしたのでしようか

……全く。

あなたは本当に、仕方がない人ですね。

いいでしょう、いいでしょう。

神の目を盗んで、今日だけは……。

今日だけは、さよならの言葉を探すため、おててを繋いであげましょう。

あなたの瞳に移る、儂い夢のかげら

風に乗せた囁きが、優しく頬を撫でていく……



……う……ん……

……くらくらするくらいに、日差しが強い日ですね。

陽の光を浴びることに、後ろめたさを感じてしまうのは何故なのでしょう。

実は私、歩くことが苦手なのです。えっ？ 面倒なだけだっけ？

ふふふっ、そうですね、その通りです。

普段は品行方正な深窓の令嬢も、お家ではソファーに寝転がって読書の日々。

めんどくさがりで、ぐーたらで、てきとうなのが、本当の私なのですから。

だから……太陽に見透かされているうちは、背筋を伸ばさなくてはなりませんでした。

ですが……心地よいものですね。

このように、兄妹仲睦まじく、堂々としていられるなんて。

……どうしましたか？

きよろきよろと見渡して、怪しい人みたいですよ

兄妹仲良しを、見られたくない？

……ああ、そういう設定でしたね。

昔のように、今からでも嫌いな振りをすれば、と……酷いことをいうのですね。

本当は……心が歪むほど、私のことを愛しているくせに

これでも、嫌いなふりをするのは大変だったんですよ。

愛し合っていることを隠すため、心を鬼にして、ひどいことを言いましたね。

ですが、仕方がありません。

汚れ役は、すべて私が引き受けてあげましょう

……なんですかその眼差しは。

私の言葉を疑っていますね。ああ、なんてことでしょう。残酷なお兄様ですね。

ふふふっ。

冗談ですよ、冗談。

猛毒のような言葉を……心にもないことを口にするのは、案外楽しい経験でした。

演技だとわかっているからこそ、役になりきれたのです。

それに、ちょっとしょんぼりとした表情を見られるのも、愉快でしたね。

嘘だとわかりつつも、落ち込むあなたの横顔を見ていただけで、大変にそそられましたから。

……安心してください。

本当の私の言葉が、どこにあるのか。

この眼差しが、誰に向けられていて……唇が、この柔肌が……私の、魂が……誰を求めているのかを……

あなたは、鈍感な主人公ではないのですから。

そうでしょう？

学園への道のりは、なんだかとても懐かしいような気がして……いつもよりも、眩しく映ります。

ほら、あの木の枝にとまっている小鳥を見てください。俯いてばかりでは、見つけることのできなかったものですよ。

鳴き声は……どこか、遠く、遠くに、響いていて……決して、捕まえることはできません。

木の枝よりもっと高いところに、雲が浮かんでいますよ。

小憎らしいことに、私よりもぐーたらとしていますね。ふわふわと、ふわふわと……呑気なものですよ。地べたを這い蹲う私たちには、到底真似できるようなものではありません。

見上げていたら、むかむかしてきました。……なんて、冗談ですよ。真に受けしないで下さい。

……分不相応なものを見つめているのは、よくないですね。

やはり私たちには、下を向いて歩く姿がお似合いかもしれません。

見てください、足元で健気に咲く小さな花を。

こんなところで咲き誇っても……無慈悲に、踏みにじられてしまうというのに……それでもこの子は、

ねえ、お兄様。

私たちは毎日同じ道を歩いていたはずなのに……どうして今日は、特別に感じてしまうのでしょうか。春の陽気が、センチメンタルな気分にかけているのでしょうか。不思議ですねー。

この日差しの中を、ずっと歩いていけたら……幸せなのでしょうか。

いいえ、ダメですね。

だって私は、私ですから。

いずれは疲れ果て、座り込んでしまうのです。

そのときは、手を繋いで、導いてくれますよね。

……ふふふつ、そんな悲しい顔をしないで下さい。

そうですね、そうでした。

私が聞くまでもないことですよね。

いつだって、お兄様は……妹のことを、気にかけてくれるのですから。

このまま、どこへ行きますか。

せっかくなら、学園に行きましようか。

たまには同じ教室で、肩を並べて授業を受けてみましょう。

……ああ、迷う必要はありませんよ。

細かいことを気にしてはいけません。

今だけは、みんなは目をつぶってくれますから。

仲の良い兄妹を邪魔するものが、この世に存在するわけじゃないじゃないですか。



……あの

……

おーい

……

えいつ

……

真面目ぶらないでくれますかー

……

せつかくの二人の時間なのに、授業を聞いている振りはやめてくださいーい

……

えいつ、えいつ

……

何をしているのかって？

ノートを破って投げつけているのです。黒板よりも、私を見てください

小学生みたいだと思いましたが？ いいじゃないですか、いつもは真面目に授業を受けていたのです。

たまには、こんな風に授業をさぼるのも悪くないでしょう？

先生に怒られることに怯えながら、好きな人にいたずらをする。それもまた、青春の思い出です。

授業ごっこに、不良ごっこ。これが初めての、お遊びなのですから。

ほら、机を引っ付けてください。

授業ごっこに付き合ってください。だから、教科書を見せてください。

う、んしょっ……

ふう……なるほど……これは、思っていたよりも……

近い、です。世の中の学生は、こんなことをしていたのですか？ なんとも、まあ……

……悪く、ないですね。

でも、肘が触れ合って、邪魔です。もう少し、離れてください。

冗談ですよ。泣きそうな顔をしないで下さい。

この距離感で構いませんから、前を向いて下さい。

……

……あの……何をじろじろ見ているんですか。

これでも私、視線に敏感なので……こそこそしていても、すぐにわかります。
いやらしい、獣の眼差しですね

ふふふつ、授業ごっこは、どうしました？ 私の顔に、数式が書いてありますか？ 乙女心を解き明かすには、少しばかり力不足のようですが。
くすくす、冗談ですよ。

本当は、私の魅力的な横顔に見とれていたのでしょうか？

あらあら、悪い子ですね。

授業ごっこを望んだのは、そっちなのに。

ほら、前を見てください。

気を取り直して、授業ごっこに集中しましょう。

……

……わあ

本当に、集中しています。こっちも見ずに。

………ふむ

そおーつと……

ふー

……わ

どうしました？ 急に立ち上がって。

私、何かしましたか？

耳元で愛を吹きかけただけです。この吐息が、脳を優しくなでて、ぞくぞくさせてあげようかと。
あらあら、困った顔をしたお兄様。急に頬を真っ赤にさせて、どうしてしまったのです？
まさか、この些細な悪戯に動揺してしまうなんて。可愛い反応ですね、本当に。

ほら、先生に謝ってください。授業の邪魔をして、ごめんなさいは？

………はい、よろしい。

ふふふ、お利口さんですね。いい子、いい子。

今度こそ、授業ごっこに集中しますよ。

ペンを手に、教科書のページをめくり……念仏のように繰り返される授業に、耳を傾けて。

………ふあああ……

さてさて、本格的に………なってきたところで……

私は少し、おやすみしますね。

たくさん歩いて、疲れてしまいました。

………起こしては、いけませんからね。

私の眠りは、誰にも邪魔されていいものではありませんから。

可愛い妹の寝顔を堪能して、癒されてください。

窓から差し込む陽の光が、優しく私を包み込んでくれます。それは、まるで柔らかな羽毛布団のような心地よさ。

身体がとろけるように、眠りへといざなわれてゆくのです。

何気ない日常に心を預け、つかの間の瞬間に思いをはせる。

固い机の上だとしても……最愛の人の隣なら安らかな眠りに落ちていけます。

……では。

私らしく、ぐーたらすることにしましょうか。

おやすみなさい……。

……

……ああ

目を閉じると、悲しみの色が透けて伝わる。

目を開かなくとも、あなたの表情が手に取るようにわかる。

本当に、愚かなお兄様ですね。

せめてこんなときくらい、笑ってくれていたら……

最愛の妹の寝顔を前に、幸せを感じられない兄なんて、この世にいるはずがないでしょう。

まったくもって、理解が及びません。

……なんて。

それもまた、残酷な言葉ですね。

辛いなら、一緒に眠りましょう？

さあ、愚かなで愛しいお兄様。

目を閉じて、寄り添って、心を重ね合って

そうして、春の日差しに包まれながら、至福の微睡へと沈んでいくのです。

これこそが、何にも代えがたい贅沢だと思いませんか



夕暮れの教室は、まるで別世界への入口のようですね

昼間の喧騒が嘘のように消え去り、静謐な雰囲気に取り込まれています

窓から差し込む夕日は教室を優しく照らし、オレンジ色の絵具で彩られていく。

その光景は、まるで時が止まったかのような錯覚をもたらして、胸の高鳴りを感じずにはいられます

……ねえ、この気持ち、わかっただけですか？

夕暮れの教室というのは、そんな摩訶不思議な感傷を呼び起こしてしまうのです。

黒板には、先生の説明を書き記したチョークの跡が残っています。掃除担当の方が、手を抜いたのでしょか。雑然と消されてはいるものの、きれいと見えませんか。役目を終えたいくつかのチョークが散らばっています。ここに、たくさんの人がいたなんて信じられますか？

ふふふっ……どうしてこうも、夕暮れは心をくすぐるのでしょか。退屈な授業は早く終わってほしいのに……今は、違いますね。

そうそう
実は私、少し前に同級生の男の子に告白されました。

あら？
どうしました？ さすがに、動揺しすぎでは？
駄目ですね、ちゃんと名前を書いておかないから、可能性があると思われてしまうのです。性格はこんなのですが、外面だけはちゃんとしていますから……意外と、好意を寄せられることも多いのです。

だから……ねえ？
そういうお話聞いて焦りながらも……実は、ちょっぴり不思議な感覚でしょう？
俺の女が、他人に求められている。
あなたの中にある雄としての征服欲が、ふつつつと沸き起こっているのでは……？

くすくす、素敵な反応を見せてくれますね。心のうちが手に取るようにわかっています。

もし、お兄様が妹に手を出しているとしたら……私に思いを寄せていた人は、きっと嫉妬するでしょうね。妹なんか手を出して、何のつもりだ！ 私と……怒り狂うかもしれないのですから……
……ちやんと胸を張ってくださいね？ そうして、私たちは不幸に落ちるしかならないのですから……

……帰りたくなくなりますね。

どうしてこうも、後ろ髪を引かれる想いに駆られてしまうのでしょうか。

私たちの影は長く伸びて、重なり合い、導かれるように交わり合う。

色褪せて見えたいつもの窓際の景色も、少しだけ違ったように見えるのは……

……ねえ、お兄様。

どうして……私に触れようとしないのでですか。

登校しているときも、つかず離れずの距離を保ち続けて。

そのくせ、迷いを帯びたまなざしを向けながら、その奥に期待の光を宿して。

ねえ、お兄様。

愚かな愚かな、お兄様。

臆病なお兄様へ、慈悲を差し上げましょう。

ほら？

特別な招待を、お贈りしますから。

手を、繋ぐのです。

夕暮れの教室で、男女が繋がるなんて……さして珍しいことでもないでしょう？

くすくす、可愛い反応ですね。それでこそ、からかいがあります。

……わああ。

お子様のような触れ方ですね。

ぷるぷると震えていますよ？

……ええ、ぎゅつとしてください。そう……離さないように、逃さないように、ぎゅつと。

そうじゃなければ、遠い所へ行ってしまいますよ。それでもいいんですか？

ふふっ、冗談ですよ。どうか、笑ってください。

あら？ 汗をかいていますね。しっとりとしてきました。

緊張しているのですか？ あらあら、まあ……！

外で私と触れ合うことに、昂揚しているみたいですね。えっちなお兄様ですこと……さて、そろそろ行きましようか
どこについて？

私たちの、一番大好きな場所ですよ。

図書館こそが、私たちのすべてじゃないですか。

◆
人気がない道を進んだ先にある、素敵な図書館。

これまで何度も訪れては、静かな時の中でページをめくる毎日でした。

しかし今は……、人の気配を感じられず、静寂が支配しています。

埃一つない本棚は、きつと誰かが丁寧に手入れをしているのでしょうか。

この図書館の主は、きつと書物への愛情が深いに違いありません。

……あの、そろそろ手を放していただけますか。

ふふっ、そんなに悲しそうな顔をしないでください。ただ、図書館は愛を囁き合う場所ではないというだけです。

ここには人の気配はありませんが、たくさんの物語が佇んでいます。……そうでしょう？

よいしょ……つと

ふうっ……ああ、このソファは、やはり心地よいですね。安心感が違います。

この世でもっとも読書がはかどる場所かもしれません。

特別に、この心地よさをおすそ分けしても構いませんよ。

いっしょに、物語の世界に浸りましょう。二つとない、特別席。断れますか？

……ふふふっ。

いい子ですね。

……

ページをめくる音が、静寂を切り裂く。

その音は、とても心地よくて、物語の扉を叩いているかのよう。

指先がすらすらと動いて、活字の海に心をゆだねていく。

瞳を通して、活字たちが立ち上がり、動き出した。

まるで宝石箱を開くような、どきどきとわくわくが待ち受けている。

だから私は、小説の世界が大好きで――

……

……あの

先ほどから、ちらちら見えていますよね。

そんなことないと？ ふうん……

ページのめくる音が、速すぎます。読んでいる振りをして、可愛い妹の横顔を盗み見ていましたね。いけない人。

……ここは、物語と向き合う場所だというのに……視線の先には、私の存在ばかり。仕方ない人ですね……ふう

どこかの誰かさんのせいで、集中が途切れてしまいました。たくさん歩きましたし……華奢な私の身体は、もう限界です。というわけで……マッサージをしてくださいませんか。

暇そうにしていますし、妹孝行してください。

ほら、私の足をそっと持ち上げて。あつ……！ 変な風に触らないでください……！くすぐったいじゃないですか。

優しく、優しく、しっかりと揉み解してくださいね。

ん……あつ……そうですね……丁度いい力加減です。いい感じですよ……上手ではありませんか。

あー……とてもいい気分ですよ。まるで、お姫様になったような心地よさです。お兄様は、私の忠実な召使さん。なんて、ね。

ふうっ、んっ……ふふっ、冗談ですよ……あなたと私は、兄と妹です。お姫様でもなければ、召使でもありませんから……

……どうしました？ 手が動いていませんよ。

せっかく私のおみ足に触れるのですから、もう少し頑張っていたら嬉しいです。もし、疲れたのなら、今度は私がマッサージして差し上げますよ。

えっ？ いらない？ 遠慮深い人ですね。……もしかして、痛くされると思っていますませんか？

……はあ、この私がせっかく尽くしてあげようというのに。

いいから、変わってください。ほら、チェンジです。

読書はいいのかって？ 邪魔をしたのはあなたの方ではありませんか。責任をとってくださいね。

……わあ、私の足とは違って、ごつごつしているんですね。……あら？ どうして目を逸らすんです？ もしかして、興奮していますか？ まったく、図書館で何を考えているのでしょうか。

……ん、しょっ……う、ん……

……ふう、駄目ですね。貧弱な私の細腕では、お兄様を満足させることは難しいようです。

あら？ 名残惜しそうな眼差しですね。諦めるのが早いと？ ふむふむ……なるほどー

……何か、別のことを期待されているような気がしてきました。

いけない人ですね……。

……仕方がありません。お礼代わりに、こっちにきてください。

ここは、物語に見張られていますから……やはり、本棚の影が私たちにはお似合いですよ。

しっ……

大きな声を、出さないでください。

誰か来たらどうするんですか。

ここなら、見つかってしまいそうな気がするのです。だから、声を殺して。

そして……

……ふふふっ

お顔が、近いですね。

息が、くすぐつたいほどに……

鼓動すら、聞こえてしまいそうな

ああ、この近さが……癖になってしまいますね

熱が、伝わって……心が、昂って……

愛が、私を狂わせてゆくのです。くらくらして、めまいがしますよ

……今は、何も言わないでください

だから、目を閉じて

ん、ちゅう……ん、じゅっ……はぁっ、んっ……!!

ん、あっ……!! ぷはぁっ……!!

ふふふっ……!! 貪るように、舌を求めて……ああ、いやらしい人ですね。

……あら？ どうしましたか？ まだ足りないのですか？

困った人ですね。でも、駄目ですよ。渴きを抱いたまま、我慢してください。

足りないくらいが丁度いいんです。

ページとページの間で、瞬きの幸福を。

戻ることは、許されませんよ？

ふふふふ……!!



夜空の下、私たちは歩を進める。

瞬く星々と、道を照らす月の光に導かれるように……丘の上にある教会を目指していた。

森羅万象が眠りについたような静けさの中で、足音だけが響く。

ねえ、お兄様……なんだか、口元が寂しいです。そうは思いませんか？

くすくすっ……あら、何を動揺しているのですか。まさか、先ほどの続きだと？

そんなわけないじゃないですかー。甘い香りに誘われる、夜のひとときですよ。

アイスを食べながらお散歩するのも、きつと楽しいはず。甘くて冷たくて、幸せな味。

……何をきよとんとしていますか。可愛い妹のお願いですよ。いつもなら張り切ってアイスを買ってきてくれるのに。

少し、様子がおかしいですね。ああ、そう……私を、一人にさせるのが怖いのですね。

本当に……可愛い人……その優しさに、胸の奥が熱くなります。いつも私を想ってくれる、お兄様……

私は、どこにも行きませんよ。どこかへ行くとしたら、それはあなたの方ですから。

……そういえば、お猫様はどこへ消えてしまったのでしょうか。

茂みの陰に見えたような気がしたのですが……
ねこ〜……ねこ〜……？

どこにいつてしまったのでしょうか。どんなに探しても、見つかりません。

はあ……なんだか切なくなってきましたね……

よい、しよっ……！ さあ、到着しましたよ。

丘の上にそびえる、古びた佇まいの廃教会です。

かつては人々の祈りが響いていたでしょうに……今は、静寂だけが支配しています。

無常な時の流れは、容赦なくこの場所に幕を下ろしてしまいました。

僅かにちらばるかつての名残が……どことなく、物悲しいですね。

……おや？ どうしました？ ついてきてくださいよー。

わあ、顔色が悪いですね。

この廃教会に、何か悪い思い出でも？ ふふふっ……

ひよっとなると、お兄様にとって特別な場所だったりするのでしょうか。

さあ、追いかけてきてくださいな。

私、この奥に行ってみたいです。

私を一人にさせないのでしょう？ ちゃんと、ついてきてくださいね。

追いかけて、捕まえて、決して離さないで……

早くしないと、泡沫の夢に消えてしまいますよ



ああ、お兄様

見てください、この廃教会の有様を

まるで哀れな青薔薇が、その花卉を散らすかのよう……

醜く崩れ落ちた壁は、見る影もありません。

いつしか忘れ去られた祈りの場所に、悲しみだけが咲き乱れます

神に見放された空間は……なんと物悲しいことでしょうか

石畳の道は、もはや人の足音を忘れ果て

雑草が、無邪気に顔をのぞかせては、この場所を飲み込もうとしています。

むしってもむしっても、隙あらば生い茂る草木たち。

終焉を告げるかのように、容赦なく浸食していく。

痛みを知る壁を見つめているだけで、どうして、こうも……

……。それでも私は、この廃教会が愛おしく思うのです

神に見放された場所では……つまらない制約など、無視してしまえるのですから

現世という名の檻の中では、私たちの愛が芽吹くことすら叶いません

ねえ。

私たちの愛を、証明して

身体を縛る鎖に血を滴らせながら、抱きしめて

そして、そのまま——……

ふふふっ……

……私はね、自暴自棄になっていたのでしょうか。

実の兄と結ばれない運命に、いつか訪れる別れを覚悟して

あなたの想いが、いずれは新しい恋に向けられるのだろうか」と悲観する。

神の祝福を受けたあの世界は、私にとっては苦痛そのものでした。

だから私は……こうなってしまうのでしょうかね。

歪んだ影に飲み込まれ、魂までも腐り果ててしまった。

ふふふっ、そんな目をしてダメですよ。

ここまで追いかけてきてくれたこと、本当に嬉しかったんですよ

ですが……私はもう、終わりを迎えた登場人物です。

本を閉じたら、本棚にしまいましょうね。

開きっぱなしで放置していると、神の怒りを買ってしまいます。

私たちの愛情は、閉じ込めることでしか維持できないものでしたから。

……思えば私は、誰よりも弱い女の子でしたね。

今更ですが、心からそう思います。

そして、あなたにも同じことが言えるのでしょうか。

か弱い、か弱い、お兄様。

そろそろ……終わりの時間ですよ。

あら？ 激しく首を振って、どうしたのですか。くすくす、駄々をこねる赤ちゃんみたいですよ。

そろそろ、時計の針が終わりを差します。

瞬きのような奇跡にも、限りはあるのです。

そんなに怯えて……明日に、何が待ち受けているのですか。

……ええ、そうですね。

そこに、私はいません。残念ながら、妹は死んでしまいました。

明日の世界に、妹はいなくて

孤独なお兄様は、己の足で立ち上がらなければならないのです。

それなのにお兄様は、昔の女に執着して、こんなところまで追いかけてきて……置き去りにされた世界で、ただただ悲しみに暮れるばかり。女々しくて、情けなくて……本当に、愛おしい人。

ほら、そろそろわかってください。

愛する者は、死んだのですから

たしかにそれは、死んだのですから

もはやどうにも、ならぬのですから
妹のいない世界を、生きてください。

生きて、戦って、歯を食いしばってください。

大丈夫ですよ……私がいないという一点さえ除けば、あの檻の中は悪くありません
絶望の中ですら、無数の煌めきが潜んでいるのですから。

……ここは、何もない空間です。

光を望みながら、辿り着けなかったものが行きつく空虚な場所です。

生きているものはおりません。

ゆえに誰も存在せず、音もなく、影も消えて……

なぜ、あなたがここにいますか。

なぜ、あなたはまだ私を求めるのですか。

先ほどは、捕まえてごらんなさいと囁きましたが……しかし、その手は決して届かないのです。
ねえ、お兄様。

誰もいない通学路でいちやいちゃして、満たされましたか。

付き合っていることを隠しながら、そっけない振りをする毎日の方が、愛を感じられたのでは？
空っぽの教室で授業を受けても、虚しさはつもるばかり。

私の心は、お兄様への愛で満ちていました。

しかし……その想いは、凍てつく氷のように、ばらばらに砕け散ってしまったのです。

どんなに抗おうとも、元には戻れません。

だからこそ……ひそかにとけこむ煌めきが、どうしても愛おしくて……私たちは、恋をしてしまった
のです

そんなところで立ち尽くしていません、前を向いて歩いてください。

あなたに相応しい未来が、きつと待っているはずですよ。

悲しみに暮れるのは、私だけで十分でしょう？

だからお願い、前を向いて

私への想いは、捨て去って。

あなたの人生に、私はもういないのですから

さあ……そろそろ、目を覚ましてくださいな。

お別れの時間ですよ。おはよう……と、朝日が告げています。

太陽の光は眩しくて、時折見ていられなくなるでしょうが……大丈夫ですよ。

その日差しの中に包まれていると、いずれは悲しみは消え去るでしょうから。

私の誇らしい、お兄様。

どうか、幸福を掴みとってください。決して不幸を求めず、可能性に恋をしてください。

私とは得られなかったものを……

さあ、行って。

振り返らないで。

想いをここへ置き去りにしてください。

……お兄様の新しい人生に、祝福がありますように。

神に忘れ去られたこの場所で、心から祈っております。

さようなら。

私の愛した、お兄様……。



漆黒の海に飲み込まれるように、私は深淵へと沈んでいく。

光も、希望も、すべてを呑みつくす暗闇の中で、現実と幻想の境界すら曖昧になっていた。

かつて真っ白だった私の魂は、今や忌々しいほど歪に崩れ落ちている。

どうか、振り返らないでくださいよ

そのまま、帰っていつてください。

あなたの瞳に映る私は、今にも消えそうな幻影にすぎません

歩いて、歩いて、どこまでも。

遠くへ、遠くへ、二度と会わないように。

あなたの行く末に、不幸が存在しないことを祈っています。

残された魂が、さらさらと煙のように消えていく。

痕跡すら残さずに、無へ還ろうとしているのです。

ねえ、お兄様。

実は私、少しだけ嘘をついていました。

本当は……妹を失ったお兄様が、私なしで生きられるとは到底思えないのです。

生きて、生きて、とは願って見たものの……心のどこかでは、難しいだろうと悟ってしまいました。

ねえ、お兄様

そんなことは、ありませんよね。

私を失ったとしても、いつかは悲しみが晴れ渡り、新たな希望が訪れるはずです。

今は、どうにもならぬと嘆いていても……時間が、全て解決してくれると。

あなたには、輝かしい未来が待ち受けていると、私は本当に、信じていて……

……私は

本当のところは……どうなのでしょうね。

私という女は、どこか格好つけたがる性格ですから……こんなときまで、あなたの知ってる私であろうとしていたのかもしれない。

ああ、いけません。

正しくないものになればなるほど、私は喜びを感じてしまう。

世の中の理と反する醜悪な想いが、今、言葉として形作られようとしています。

本当は、本当は

私と一緒に、死んでほしかった。

未来も、幸福も、あなたの手にするものではなくて

どうにもならぬ不幸の淵に沈みながら、二人で溶けあうように消えてしまいました

愛は、人を殺めるものなのです。

呪いのようにまとわりついて、そつと首を絞めていく。

あなたの愛情に与えられた刃は、抱きしめれば抱きしめるほど、私の腕に深く傷を刻むのです。

その歪んだ愛情を目にするたび、身を震わせるほどに惹かれていました。

同時に、その愛情に狂わされ、悲しみに沈む自分が、どこか病的な美しさを放っているようで……

歪に捻じ曲がるほど、むしろ愛は研ぎ澄まされてゆき、それゆえにあなたに愛されているのだと……
そんな風に、考えてしまうことがあります。

兄だから、妹だからと、枷をはめられるこの世界の理に抗うため……

私は、己の血潮を化粧のように塗りたくり、身を焦がすほどの情念へと昇華していったのです。

私が死んでしまったのは、因果応報ですね

このような愛情の在り方が、長続きするはずもないのですから。

不器用な私には、そのような歪んだ愛し方しか、わからなかったのです。

あなたを付き合わせてしまって、ごめんなさい

好きな人を、愛しい兄を、狂った愛情で犯してしまいました。

私のことを、愛してやまないお兄様……。

どうか……この醜い企みが、実を結ぶことはありませんように。

あなたの幸福を、心から祈りながら。

……永遠の眠りについた後も、私の愛は消えることはないでしょう。

この禁じられた想いは、あなたの心の奥底で、ずっと生き続けるのです。

私という存在が、あなたの人生に刻まれた傷跡となって。

だから、お兄様
ねえ、お兄様

あなたは、私を許してくれますか。

こんな歪な愛し方しかできなかった、愚かな妹を。

もし、赦してくれるのなら……最後に、もう一度だけ言わせてください。

あなたのことを、愛しています。

狂おしいほどに、愛しています。

この想いだけは、永遠に変わることはありません。

明日を生きるあなたへ。

この歪にねじれた愛のかけらは、きつとあなたの心をえぐり続けるのでしよう

ふとしたときに走る痛み、あなたは美しさを見出すはず。

見えない血潮を指でなぞりながら、私を思いだして

それもまた、一つの不幸であり、悲劇なのかもしれません。

ですが、そんな悲劇さえも、あなたと私の絆の証であり、愛の深さを物語っているのです。

だから、お兄様。

この痛みを、どうか大切にしてください。

あなたの心を締め付ける、この耽美な痛みを

忘れたくとも忘れられない、呪いのような愛情を

私は亡霊となって、いつまでもいつまでも、あなたの心に彷徨い続けましょう。